Ｖｉｔａｌｉｔé インタビュー

消えゆく
日本の美に惜別する

アレックス・カー

聞き手：佐多保彦　株式会社東機貿 代表取締役社長

Alex Kerr / アレックス・カー
1952年米国生まれ。エール大学日本学部卒業。慶応大学留学後、英国オックスフォード大学で中国学を専攻。東洋の書画骨董、歌舞伎に造詣が深く、著書に『美しき日本の残像』（新潮文芸賞受賞）がある。京都府亀岡市在住。

佐多：カーさんは四国の祖谷渓で、古い茅葺きの日本家屋に暮らしておられたそうですね。祖谷は日本文化を愛してこられたカーさんの原点ともいえる場所なのでしょうか。

カー：僕は12歳で初めて来日したときから日本が好きで、アメリカに帰ってからも日本の勉強をすることばかり考えていました。エール大学2年生の夏に、2カ月間、日本中をヒッチハイクして回り、最後に行ったのが祖谷でした。金毘羅参りで出会った友人が、アレックスが絶対に気に入るところに連れていってあげる、と誘ってくれました。まだ舗装されていない山道をバイクに乗って、ちょうど雨の中、だんだん山奥に入って行くと、じわじわと白い霧が湧き上がってきて、古い屋根がポツン、ポツンと見える。‥‥それは仙人の世界かと思いましたね。

よく日本通の外国人がお茶や日本建築が好きといいますが、僕はそれ以前のもの、霧とか山とか岩、石、そういったものを愛します。神道で山や川に神様が宿っているというように、祖谷には、そのような目に見えない力を感じました。祖谷渓は平家の落人が隠れ住んだという日本の秘境です。26年前の当時は、まだまだ日本の田舎が美しかったというだけではない、僕の憧れの東洋の、神秘なる自然があったと思います。

ところがいまは観光地になってしまって、もう地獄の風景です。有名な葛橋のすぐ傍に無造作な鉄とコンクリートの橋、見苦しい看板、無粋な箱型の建物、お粗末でみっともないものが平気で作られています。僕はそれを見ると悲しくて、祖谷に行くのが辛くなってしまいます。

佐多：日本人には、美しい日本という固定イメージがあって、実態は見えていない、あるいは見たくない、と。

カー：そうですね。しかし皆どこかで、不満をもち、これじゃつまらないと、わかっているのです。だからこそ年間2000万人もの人が海外旅行に行き、京都や奈良には修学旅行以外は行かないのです。大人の行ける文化的な都市がなくなってきているからです。

先日僕は上野の東京都美術館に、お華の家元の展覧会を見に行ってきました。何百人という先生の作品がずらっと並んでいました。が、これがなんと、恐ろしい。材料の半分以上が花ではないんですよ。ビニール、ワイヤー、段ボール、それらを切ったり貼ったり、花を千切ったり、ねじ曲げたり、スパンコールで飾ったり‥‥、ちゃちでグロテスクなモンスターです。自然の花に対する尊敬もなにもない、そんな怪物をつくるような発想が、要するに、自然破壊の極まる粗末な都会に住んでいる、家元の発想。お華の先生まで、花がわからなくなっているのです。

佐多：日本はもともと貧しい国だったのです。ポール・クローデルという明治時代の駐日フランス大使が著書に書いているように、貧しいけれどもノーブルであった。それが精神的な支えであった。しかし近代化を急ぐあまり、ゆとりをなくし、文化を等閑にしてきました。

カー：僕が若いころから日本について教えられてきたことはこういうことでした。東洋では日本はいち早く西洋の技術と自国の伝統をうまく調和させて新しい国家をつくった成功例であると。第二次世界大戦で大きな間違いをおかしたけれども、敗戦後はまた新たにスタートし、経済的に発展し豊かになったと。

しかしどうでしょうか。60年代になり、各家庭にテレビや冷蔵庫が入り、なんとか貧しさから脱出したころから、社会の形ができてしまいました。この辺でいいや、日本式でやりましょうとばかりに勉強をやめ、あぐらをかいた結果、中途半端な近代化に踏みとどまってしまって、そこから方向を変えられないのが今の日本ではないでしょうか。60年代、70年代初頭の工業化社会のまま、どんどん変わりゆく世界に対応できなくなっています。

周囲をよく見て思いなおしてみれば、悲惨な戦争を引き起こした戦前の軍国主義とまったく同根の文化的社会的な原因で、いま日本はもう一度止めどもなく進んでしまっています。美しかった山も川も削りとられ、コンクリートばりになっています。長良川の河口堰も、諫早湾の干拓工事も、誰も喜ばないようなことなのに止められない。杉植林は大失敗だと誰もが知っているのに廃められない。オンスイッチはあるけれどもオフスイッチのない戦車が進んでいくように。これは日本の悲劇です。

佐多：いまの日本の状況は、西洋の技術を自国文化によって消化できずに、いわば巨大な消化不良をおこしている状態だと思いますが、後続の東南アジアや中国はどうでしょう。

カー：東南アジアや中国は違うでしょうね。確かに近代化によって最初の10年や20年はひどい自然破壊が起こるでしょう。しかし一方で現に自然保護運動も、日本よりはるかに盛んです。

中国に昔からある道教の「易」の思想では、宇宙は絶えず変わる、雲のように、波のように、霧のように動いている、それが宇宙の「気」であり、変わることが「易」、動いているものにどう合わせるかが「道」なんですね。今日あるものも明日はない。根底にそういう思想がありますから、華僑の人たちは変化が速い。世界が変わると、彼らの社会も変わります。いま彼らは本当の近代化に踏み切ろうとしています。

もっと言いますと、日本は「平和」の好きな国です。つまり波風のたたない、静かなシーンとした平穏無事な状態です。江戸時代、鎖国政策下の武家社会のように、時間が止まったなかでつくられた「平和」を好む傾向がありますね。新しいものをとり入れないで、十年一日、中途半端な快適さにあぐらをかく。日本芸術の一番深いところにある永遠の静けさみたいなものには、皆、惹かれます。日本文化の強さでもあり、素晴らしい精神性です。しかし、これが諸刃の剣なんでしょうね。

それと、清貧が美しいという、シンプルで何でもないものこそが美徳であるという、そういうものが、日本文化から蒸発してしまいましたね。祖谷の秋は、薄の白い穂に夕陽が輝いて、それはそれは美しい。そんな何でもないものを大事にするのが本物の文化だと思います。モニュメントや多目的ホールが文化ではありません。

奥祖谷二重蔓橋

武家屋敷「旧喜多家」

佐多：日本の社会では、ある一定のルートを外れると、非常に苦しまなければなりません。そのために人間がいきいきと生きられないのですね。そんな日本にはもう救いはないのでしょうか。

カー：もしあるとしたら、人間にあるでしょうね。例えば歌舞伎の坂東玉三郎さんです。彼の魅力を一言でいったら、それはピュアということです。200年に一人というほどの、生まれながらの天才であるだけではなく、芸術に対して命の全てを捧げ尽くしています。彼には芸術以外何もありません。ふっとした手の動き一つ、ちょっとした言葉一つ、シンプルで何でもないもの、見ていなかったら分からないぐらいの、静かなちょっとしたものをすごく大事にしています。それが全てなんです。何でもないようでいて、実は天と地の違いがあるんです。そんな静かな、地味で、密やかなものが分からなくなり、消えてしまうと、日本舞踊や歌舞伎を飾りたてて、グロテスクになる。派手に動く、天に飛ぶ、冗談にする。‥‥ばかばかしくなってくる。玉三郎さんはピュアだから、俗世間とはちょっと離れた道を歩みました。彼の話は実にエッセンシャルでコンサイス、つまり俳句です。直感的で精神性に満ちたことを短い美しい言葉で、ピシッと言うので、いつも驚かされます。前置きがあって説明があって、結論に行くというような人ではありません。それはとても日本的なことです。

40代以上の人達のなかに、古き良き時代の本物を見たことのある人がいます。本物の良さが分かり、同時に現状もよく知って、自分なりに消化して、そして何かを残したい、世界に影響を与えたいと、一生懸命な人達、彼らのなかに望みの綱があります。日本の山や川、日本の田舎や街は駄目になりました。けれども、まだ人間の中に美しい日本があると思います。

佐多：玉三郎さんほど洗練されると、観客がついていけなくなる？

カー：そんなことはありません。切符が買えないほど、日本人は文化に飢えています。本当に美しいものに飢えているのです。

先程お話しした、生け花の展覧会場でのことです。グロテスクな花の群れに失望した僕が、たまたま見に来ていた外国人の女性に聞いてみました。すると日本的で素晴らしいっていうのです。僕はこれのどこが日本的なんだ、ビニールやプラスチックのどこがいいんだと怒ったんです。すると、その隣にいたごく普通の日本人のおばさんが、そうなのよ、自然破壊なのよ、と感激して言うんですね。彼女は、お華の先生たちの展覧会だから素晴らしいに違いないという先入観に支配されていて、自分に自信がないのです。日本的だと言われても、心のなかではちっとも嬉しくなかった、嫌だったんですね。

佐多：そうですか。しかし20年間日本で暮らしてこられたカーさんも、この夏から、タイに引っ越されるということですが。

カー：20年前には、東洋が好きな僕としては、日本に来るしかなかったのです。中国やタイにはなかなか行けませんでした。東西交流といえば西洋と日本との交流でした。しかし今は違います。東洋の選択肢が増えて、その結果日本はそれらのなかのひとつになったのです。健康的なことと言えるでしょう。けれども日本文化の現状では、戦車の前に素手で立ちはだかるようなものです。

一方バンコックは東南アジアの首都的な存在になり、国際社会が美しく花開いています。そこで僕は、20年間日本で学んできたものをタイで生かしたいと考えています。つまり、僕は京都亀岡の宗教団体・大本伝統芸術学苑で日本の伝統芸術セミナーのお手伝いをしてきました。外国人がお茶と合気道、書、仕舞い、この4つを日本人の先生から直接学びます。日本文化は無口で、非常に簡素な俳句的な言葉でしか教えません。動きや体で感じるものなんですね。1カ月間、朝から晩まで伝統に徹することによって、家元制度やしきたりのむこうにある、日本文化の真髄が見えてきます。これが素晴らしい影響を人に与えるのですね。

タイの舞踏、お華や接待の作法、伝統的な健康法などの底には深い仏教的精神性が流れています。しかしそれを教えるシステムがないのです。いま危機的状況にあるタイのひいては東洋の伝統文化を残すために貢献したい、それが僕の新しい仕事と思っています。

写真：梅村貴子